

はじめまして&おひさしぶり。本日は御立寄りありがとうございます。
「ありすやま むどう」と申します、しがないSS書き同人屋でございます。

突然ですが、引越しました。ようやく独自ドメインを取得と相成りました。
有栖山公園設立 10 周年にしての快挙。サークルとしてもこれから細く長い活動をして
いきたいものです。今後ともよろしくお願い致します。

さて、冬コミ。
昨年から引き続き、二度目。夏を含めると連続三回目のということで、コミケ参加もそ
ろそろ板についてきたかと？ 夏冬の締め切り前の修羅場モードなど、世間の同人作家さ
ん並の事を当然のようにするようになりました。

初めての夏コミサークル参加。冬から連続当選で嬉しい限り。
今年は冷夏で、幾分か過ごしやすい会場になっていることでしょうか？ 今は前日の
夜。雨はまだ、降り止みません。涼しいほうが、楽ですからね。何より「状況、ガスっ！」
とかって叫ばなくて済みますからねえw（笑い事ではない）

今回、グッズを目当てに来られた方、申し訳ありません。再販の扇子のみです。これか
らは、SS 小説サークルとして、細々とやっていく予定です。生暖かく見守ってやってくだ
さい。一応夏冬とその間、年 4 回を目標に本を出していきたいなと思っております。Age
オンリーイベントが開催されなくなった今、夏冬以外は通販と次のイベントに合わせて販
売という形になっていくのでしょうか。

今回痛感したのが、イベントだからといって根性入れて短期間で書こうとするのが如何
に間違った方向性かということ。やはり普段から、創作というものに目を向けていかなけ
れば、より上の作品は書けないのだなと。もっと尺の長い、重みのある作品を書けるよ
うになりたいなと。まあ、そんなことを考えていたりするのです。日々これ精進。というこ
とで、頑張ろう。

Web 公開小説も計画中。やはり露出を増やすのが、上達の秘訣かとおもいまして。
だって、露出の多い服着てるおにゃのこは、綺麗な子が多いですから w

昨日片付けたはずの酒瓶は、また部屋に散乱していた。
速瀬水月は、今日も彼の部屋を訪れ、世話をする。
「一体どこで買ってるのよ。まだ未成年だったっていうのに」
「ああ」
壁にもたれかかる孝之は、生気の無い声で答える。
「こんな姿、元気になった遙に見せられないでしょ？」
母親が子供にやさしく論すように、彼女は孝之に優しく語りかける。
遙という言葉に、ピクリと彼は反応する。
「どんなに待っても遙は……遙は、起きないんだ」
彼は力なく言う、うなだれた。
「そう。じゃあ忘れちゃいなさいよ」
彼女は、冷たく、突き放して言った。
「お、おいつ 今なんてっ！」
遙の事、忘れちゃえて言ったのよ」
急に声を荒げる彼に怯むことなく、水月はたたみかけた。
「なんてことっ」
孝之は、水月に向かって手を振り上げた。
「殴っても良いよ。そしたら手の痛みで、私がここにいるって判るから。
夢じゃない現実だってわかるから」
水月は怯えることなく、彼の目を真直ぐに見返した。睨み付ける彼と、
視線が絡む。
「やっど私のこと見てくれたね、孝之」
「なに言ってるんだ？」
悲しげに、でも優しく微笑む彼女に孝之は当惑した。
「今、あなたの目の前にいるのは誰？」
「なに言ってるんだ？ 他に誰か居ると……」
「まじめに聞いているの。答えて」
「はや……せ……」
力強い彼女の言葉に、孝之はたじろぎ答える。
「そうよ、速瀬水月よ。あなたのことを好きなの」
「な……」
孝之は驚きを隠せず、声を漏らしてしまう。
「孝之こそ目を覚まして。目の前のあなたを大好きで守りたいと思っ
てる私を見て。遙が、じゃないの。今の孝之を、私が……私が見てられ
ないの、辛いよ」
彼女は一気に言葉を吐き出すと、孝之をじっと見つめた。その目から、
大粒の涙を流しながら。
「速瀬……」
水月は孝之を胸に抱き寄せると、そっと頭に手を添える。
「孝之がんばったね……もう一人じゃないから、私がいるから」
孝之は無言で、彼女の胸の中で泣いた。互いがそこに居ることを感じ
ながら、二人はその場で静かに泣いている。
孝之がふと顔を上げると、自然と二人の顔は近づいていった。
そして、そっと口付ける。
唇が離れ見詰め合う二人の顔は、もう友達同士の顔ではなかった。